

日本ブロンテ協会関西支部
2016年大会プログラム

場 所:武庫川女子大学中央キャンパス
中央図書館 C-804教室
(〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46 阪神電車「鳴尾」駅下車 徒歩約7分)

日 時:2016年3月26日(土)13:00~19:30

司 会:皆本 智美(摂南大学准教授)

開会の辞:服部 慶子(日本ブロンテ協会関西支部支部長・大阪大谷大学教授)

会長挨拶:白井 義昭(立正大学教授)

会場校挨拶:玉井 暲(武庫川女子大学文学部長)

研究発表:13:10~14:10

Jane EyreとLucy Snoweにおける「書くこと」の問題

馬場 理絵(東京大学大学院生)

『嵐が丘』における「手」の表象——〈分離〉と〈融合〉のテーマ

井寺 利奈(京都大学大学院生)

講 演:14:25~15:25

『嵐が丘』とキリスト教——その近さと隔たり

鵜飼 信光(九州大学教授)

シンポジウム:15:40~17:10

タイトル「ブロンテのアダプテーション作品を検証する——映像と音楽そして語りの面から——」

司会 松井 豊次(大同大学教授)

原作と映像の差異——アンドレア・アーノルド監督による『嵐が丘』の場合

橋本 千春(東洋大学大学院生)

エミリ・ブロンテの詩とAnnoisの音楽

後中 陽子(神戸親和女子大学講師)

ジーン・リースによる『ジェイン・エア』改作——多声的テキスト『サルガッソーの広い海』誕生

宮川 和子(神戸大学講師)

総 会:17:10~17:20

閉会の辞:内田 能嗣(日本ブロンテ協会顧問・帝塚山学院大学名誉教授)

懇親会:17:30~19:30

場 所:武庫川女子大学中央キャンパス 公江記念講堂地階 食堂「アゼリア」

会 費:5,000円

日本ブロンテ協会関西支部

事務局 〒530-0055 大阪市北区野崎町1-25 新大和ビル3F 大阪教育図書株式会社内

TEL: 06-6361-5936(代) bronte.kansai@gmail.com

研究発表

Jane Eyre と Lucy Snowe における「書くこと」の問題

馬場 理絵(東京大学大学院生)

Jane Eyre (1847)は進取の気性を有した Jane の力強い語りで構成された作品であり、彼女が書く自伝という設定であるが、驚くべきことに「書き手」としての Jane Eyre という観点からの批評はこれまであまりなされていない。Janet H. Freeman が指摘するように、Jane の「書く」能力は「語る」能力と同一化されているからだ。しかし、*Villette* (1853)においては Lucy Snowe が、自らのテキストを“heretic narrative”としながら、それでも「書く」ことを選ぶシーンがはっきりと挿入されている。また、*Villette* では「書く」と「語る」とは明確に区別されており、Jane と対照的に Lucy は自分の感情をうまく表出することができないが、これはこの二つの行為が分裂しているからにほかならない。本発表ではここに「書く」という行為に対する作者の作家としての意識の変化を探る契機があるとし、*Villette* では *Jane Eyre* よりこの主題がより深化されて描き込まれていることを指摘したい。

『嵐が丘』における「手」の表象——〈分離〉と〈融合〉のテーマ

井寺 利奈(京都大学大学院生)

Dorothy Van Ghent は、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)においてヒースクリフとキャサリンの〈分離〉と〈融合〉を象徴するものとして「窓」を指摘した。「窓」が象徴的に二人の関係性を表象するのに対し、「手」は具象的に二人の〈分離〉と〈融合〉を表すものである。小説冒頭部、嵐が丘屋敷を訪ねてきたロックウッドに対し、ヒースクリフは自身の「手」をウェストコートの中に引き込めることで彼と握手することを拒む。この「手を伸ばす／引き込める」という動作は、作品の中でさまざまな人物によって繰り返される。構造的な一貫性をもって描かれたそれらの場面を追っていくことで、『嵐が丘』における手を媒介とした〈分離〉と〈融合〉について考察したい。